

CONTENTS

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談 第32回 ゲスト 竹本住大夫さん●人形浄瑠璃文楽太夫	
百点満点の芸はできまへん	4
長官コラム 文化庁の抜穴	9

いさいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート② 倉敷市立美術館(岡山県)	22	文化庁提言	文化ボランティア活動の推進のために	大谷圭介	10
芸術文化の活動風景 ③ 石原良子(面打ち(能面制作者))	23	有識者提言	博物館・美術館における文化ボランティアの可能性	井上洋一・柴田英紀	14 12
そうかこうすればいいんだ! 著作権教育実践事例 ⑩ e-learning を利用した著作権教育	24	事例紹介	全国に文化ボランティアの花を咲かせる		
文化交流使の活動報告 ④ 松本直美(舞台照明家)	25	NPO法人福井芸術・文化フォーラム	子どもの美術教育をサポートする会	福井県・滋賀県	18 16
伝建地区を見守る人々 伝建歳時記 ⑧ 関宿重伝建選定 20年を迎えて(三重県関町)	26	文化ボランティア推進モデル事業		政策課	20
遺跡を楽しむ ⑥ 縄文に触れて遊ぶ	28				
文化庁の地域文化振興施策 ③ 平成21年度第24回国民文化祭開催に向けて	29				
国語研究の最先端 ⑩ 国語を電話で聞く・答える	30				
風を呼ぼう、わが町に 登録文化財との歩み ⑩ 近代の銘仙のまち 秩父の歴史的建造物	31				
文化カニユース from 関西 関西元気文化圏の特色ある取組 ③ 文化を伝えるまなびすと	32				
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法—文化財鑑賞の手引き—④ うつわを飾る	33				
日本の伝統美と技を守る人々 選定保存技術保存団体編 ② 祭屋台等製作修理(祭屋台等製作修理技術者会)	34				
第51回日本伝統工芸展	35				
文化財の新指定(美術工芸品関係—3)	37				
京都国立博物館 特別展覧会協賛 特集陳列 もうひとつの守屋コレクション—中国の銅鏡—	41				
奈良国立博物館 大和の神々と美術 談山神社の名宝	42				
東京国立近代美術館 フィルムセンター 特集・逝ける映画人を偲んで2002—2003	43				
東京文化財研究所 第35回東京文化財研究所芸能部公開学術講座	44				
バーミヤーン遺跡保護・復興に関する公開シンポジウム	44				

今月の表紙	(上) 三鷹ギャラリーにおける文化ボランティアの活動 (下) 文化芸術懇談会における備中神楽(備中成羽社)
-------	--

新国立劇場スポットライト	45
12月の国立劇場	46
芸術文化振興基金ニュース	47
題字デザイン 桑山弥三郎	

百点満点の芸はできまへん

太夫はピッチャー

河合 昨年、人形浄瑠璃文楽がユネスコの無形文化遺産の傑作に宣言されて、本当によかったです。文楽は一度観たらよさがわかるんだけど、知らないで誤解している人が割とあるんですよ。あれは子どものもんやと思うたり、非常に難しいもんやと思うてる人がいる。

住大夫 昔は大衆芸能でやさしいなあ。教養番組と違いまんねん。もっと気楽に來てくれはったらよろしおまんねん。言うてるのがわからんと言やはりますさかいなあ。浄瑠璃は純粹の大阪弁ですし、死語になつてゐる言葉がずいぶんおます。そやけど、その一字一句意味がわからんでも、その場の雰囲気やつながりとか、三味線音楽、人形の動き、太夫の語り、そういうもんを味わつて見ていただいた



ら、わからんなりにわかつてもらえんやないかと。文楽は粗筋だけわかつたらええもんと違ひますさかいなあ。

河合 違ひますよな。

住大夫 このごろ高校生の文楽教室に字幕を出しているんですわ。ところが、字幕が両側へ出ると、やっぱり目がパツとそっちに行きまんねん。文楽は、字ばかり追うて、文章ばかり追うてもららんやなしに、やっぱり三味線の音やいろ

んな感情込めた音、それから太夫の語り、それにつれて人形の動き、その総合芸術でやさしいなあ。

河合 今の人たちは、わかるということに非常に関心をもちますんでね。全体としての雰囲気を感じ取るというよりも、ちよつとわからんと困るというんで。

住大夫 字幕出されることは、我々にはショックでんねん。私はうちの若い太夫に怒るんです。「おまえらの言うてるのがわからんさかい、字幕となつてくるのや」と。声ばかり出して、何を言うてるやらわからん。どういう人物が何をしゃべつてゐるかということわからんさないきまへん。登場人物、人形の頭、衣装、それに合うたような発声をして、ようわかるようにしないとなあ。

私は野球が好きですからすぐ野球に例えるんですが、浄瑠璃語りがピッチャーでんねん。キャッチャーが三味線弾きで、人形使いが野手でんねん。ピッチャーがリズムよく放つてたら、キャッチャーはリードしよしいし、守つてゐるのも守りやすいというのと同じで、太夫がしつかり

浄瑠璃語つたら、三味線も弾きよしいし、人形も使いよしいし、お客さんも喜んでくれはる。太夫の責任は重大でんねん。昔は文楽は「聴きにいく」と言うてましたわね。今は「観に行く」に変わりましたなあ(笑)。

河合 なるほど。

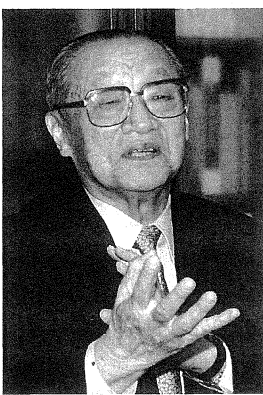
住大夫 やつぱり太夫がしつかりしてないとあきまへん。海外公演では浄瑠璃語りのことを「シンガー」と言うんですよ。シンガーの言うてることはわからなくて、声の出しよう、顔の表情でわかる。人形の動きもありますし。「曾根崎心中」で最後心中するとこなんか、男の人でも泣いてはるんです。私は、情愛に国境はないなといふ思ひまんねん。

河合 オペラの場合には、指揮者というのがいるわけですよ。文楽は太夫がある意味で指揮しているんですね。

住大夫 「指揮者はいないのか」とよく言われます。しいて指揮者といへば、やっぱり太夫でんねん。浄瑠璃語りです。

河合 太夫一人で女になったり男になつたりおじいちゃんになつたりいろいろす

たけもと・すみたゆう(本名・岸本欣一) 人形浄瑠璃文楽太夫。大阪市生まれ。養父の6代目住大夫に幼少より手ほどきをうけ文楽に親しむ。戦後すぐ豊竹古親太夫(後の山城少掾)に入門し、昭和21年8月豊竹古住太夫の名で初舞台。昭和56年竹本文字大夫のときに切り場語りとなり、昭和60年、7世住大夫を襲名。平成元年には重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された。平成14年、芸術院会員に任命される。受賞歴は芸術選奨文部大臣賞、紫綬褒章、勳四等旭日小綬章など多数。



父が「おまえどないすんねん」「文楽の太夫になる」。それやったら、わしの手元に置いといたら甘やかすというので、当時の豊竹古鞠^{とよたけふるまき}大夫師匠、後の山城少掾^{やまぎのせうげん}師匠に預けられたんです。

私はいたって不器用で、覚えが悪うて、悪声でんねん。まあ、それで私よかったと思うてます。それなればこそ今日までこれたと思うてます。

河合 やっぱり、頭に入ったらあかんのですよね、体に入らなあかんから。利口な人は、すぐ頭へ入ってしまうんです。そしたら芸にならないですよ。

住大夫 ぼろくそに怒られても、こっちも食らいついていきましたしね。「あんた、好きでんな」と言われましたなあ。下手な横好きでも、やっぱり好きにならなあきまへん。

河合 僕は笛吹いとるんですけど、下手の横笛言うてるんです（笑）。好きというほど怖いもんじゃないです、本当に。

住大夫 このごろでこそ、自分で演目は選べるようになりましたが、二〇年ぐらいい前までは、あてがいぶちでつしやろ。

嫌な役が回ってきまんねん。「ああ、嫌やなあ。嫌や、嫌や」と思うてたらよけい覚えられしまへんし、お客さんに悪いし、嫌なもんほど余計稽古するんです。稽古してるうちに、その嫌がだんだん薄らいできて、好きになっていくのです。そうすると自信が出てくるのです。

河合 そうそう、そうです。

住大夫 このごろ私開き直ってまんねん。百点満点の芸は絶対できまへん。もう基本に忠実に素直にやること、これしか手がおまへん。素直にやっていたら、そこに何かが出てきて、それがお客様に伝わって、泣いたり笑ったりしてくれはります。

河合 基本に忠実にやったら思いがけないことが起こりますやろう。何か自分と違うものが出てくるというか。

住大夫 そうでんねん。さんざん稽古でやっでできないときに、舞台へ出て、お客様から力を引き出してもらったときがありまねん。そしたら、客席と舞台とが一つになって、楽しい舞台ができまねん。

河合 そらもう、何というても芸の醍醐味ですな。

浄瑠璃はええもんや

住大夫 えらい我田^{わがた}へ水引くようですけれど、浄瑠璃でええもんでんなあ。私ここ一五年ぐらいい前からそう思うようになりましたなあ。それまではもうがむしやらにやることばかりでしたけど、このごろ、^{（ああ、ええもんやなあ。ようできてるなあ）}と思うようになりましたなあ。やっぱり年でつかいな。

河合 しかし、本当にそこまでいくのは大変ですけどね。確かにええもんでんなあというところへはね。

住大夫 やっぱり最後は人間性でんな。私は年を売り物にするのはいやでんねん。「あの人、まだやっではるわ」と言われたくないので、自分で見切りをつけようと思うてます。好きでやっでますし、これがないか難しおまんあ。今月悪かったも次は何となるやろうと思うて、しまいにだんだん止めるに止められないお人もおられましたなあ。うちの社会で引

るわけでしょう。そのときに、声色になつたらあかん。あれはすごい大事なことですな。

住大夫 声色になつたらいかんし、というて地声でもいかんし、声をこしらえたらいかんし、そこに太夫の難しさがおまねん。音曲^{おんきょく}といひますからね。その「音曲」の「音」というものが声に備わってきたら、浄瑠璃らしくなるのです。これは、文章で書きあらわせないんです。耳で聞き分けてもらわんと。

一番困るのは、独り言とか、内緒事言う場面があるんですけど、独り言は大きな声で言うたら、独り言に聞こえしまへん。内緒事を大きな声で言うたら内緒に聞こえしまへん。それでお客さんにわかるように。

河合 しかも、それは内緒事やとわからないかん。

住大夫 浄瑠璃というのは、日常の会話と一緒にんねん。今、こないしてしやべつても、勝手に息が引けますやんか。そして勝手に息が出てますやんか。息の強弱によって、お客さんに伝わる感情が

変わってきますさかいね。

例えば、「双蝶々曲輪日記^{ふたてつてきりりんにっき}」という芝居の「引窓の段」をやると、お客さんが泣いてくれてはりまんねん。それはねえ、本読んでもかわいそうでんねん。それが演者がやってお客さんが泣いてくれはれへんかったら、よっぽど演者が悪いんですわ（笑）。自分の欠点をわかって、それを直していくように努力せなあかんつと、私は口酸っぱく言うてまんけどなあ。

お客さんは入場料払うて来たはりまんねん。私ら給料もろうてまんねん。お客さんが入場料払うて来たはるのに、お土産がなかつたらあきまへんわな。「ああ下手やけど」所懸命やつとるな。また行つたらか」とそういう気を起こさせるようにせなあきまへん。それは何や言うたら、気持ち、心でんな。息を一杯出してぶつけていかなあきまへん。そうしたらお客さまに何かが伝わっていきますなあ。

生きて帰って 大好きな文楽の世界へ

河合 師匠が文楽の修行を始めたのは幼

少のころからでしょう。

住大夫 私は、稽古をしたのが小学校四年からですけど、小学校卒業するときに、親父に「文楽へ入る」と言うたら、「あかん」と言うんです。この世界は実力主義で、御曹子やからいうて奉つてくれないうし、芸は難しいし、修行は厳しいし、お金はもうからないし。だから、学校行けと言われて、旧制の中学校に行きました。それでもやっぱり浄瑠璃の稽古はしてたんですよ。旧制の専門学校（現近畿大学）を卒業して、戦争中、兵隊に行くことになり、送別会で女太夫さんに三味線を弾いてもらうて、浄瑠璃を語ったんです。それを聞いて、親父が「おまえ、そんだけ好きやったら、帰ってきてなれ」と。これはしめた、どんなことがあつても生きて帰ってこんならん」と思うて。そんなこと思ってるから、日本負けたんでんなあ（笑）。

河合 いや、そやけど、生きて帰ってきたらええ。

住大夫 一三か月上海と蘇州にいました。昭和二十一年一月末に帰ってきまして、親

退ができたら幸せです。
河合 難しいですね。

住大夫 これはよっぽど自分を見失わんようにせなかんと思いまんなあ。自分の欠点を知って、それを直していくように心がけ、引くときは潔く身を引かないかんなど思っています。

河合 それでも、年とつたからちゅうてやめるようなもんやないですね。いくらでもできる時はできるんですから。

住大夫 それがために若い時分から厳しい稽古で舞台を積んできて、六〇、七〇になって花が咲きまんねん。若いものに、若いときに厳しい稽古をやつとかなあかん、楽しんでたらあかんとは常に言うてまんねんけどなあ。

大阪で生まれ育った 文楽への思い

河合 文楽は大阪生まれの芸術ですが、特に関西とか大阪とのかかわりで何か感じられますか。

住大夫 私は大阪で生まれ育って、大阪で生まれ育った芸術をやっていることを

自慢にしてみんな。ところが最近、昔の大阪の風情がなくなってきた、それが寂しいでんなあ。昔の大阪のお客さんは、辛い人が多かったでんなあ。下手くそ、まだやってるのか」というような顔して、手もたいてくれはれへん人がいたはりましたけど、このころは変わりましたなあ。東京のお客さんは何かを理解しようとか、何かをつかもうとか思っていて、客席で一所懸命ごらんになってはつて、こっちもそれはひしひしと感じるんです。戦前から、文楽は東京へ来た人気があったです。今の時代、東京公演はいつも初日から千秋楽まで切符が売り切れでありがたいことです。

河合 東京では文楽を見たくても見られないという声をよく聞きますね。

住大夫 長官はいつも関西の文化を元気にしようと言うてくれはって、ありがたいでんなあ。大阪市役所の職員皆さんが名刺に文楽の写真を入れて、文楽応援団と銘打って、いろいろと尽力していただいていますし、ボランティアで応援団をこしらえて応援してくれたはる人々もいた

はります。ありがたいことで、私たちは幸せです。

河合 確かに来る人は少しは前よりも増えてきてるし、関心も増えてきてますしね。何かもう一押しせなかんやせんあ。

住大夫 こんだけ皆さんにいただいで、私は若いものに、とにかく感謝の念がないといつも言うんです。我々はただ舞台へ出てやるだけですけど、舞台へ出るまでにいろんな舞台の裏方の人から、文楽を支えてくれてはる人が大勢いたはります。文化庁や国立劇場にしたって、予算を組んでやってくれてはるんです。この厳しい時代に、うちは倒産も首切りもおまへん。それを感謝せなあきまへん。ありがたいう気持ちがあったら、稽古も覚えなかんし。結構やなあと思いう気持ちがあるが舞台に出るのです。また、それでお客さんに何かが伝わると私は言うんです。

文楽をより広めるために

河合 文楽をもっと振興していかないけませんけど、そういう点で何かお考えは

ありますか。

住大夫 私は、現状維持ですつと行けたらええのになあと思っております。興行価値がなくなつて、公演日数が減ると、私たち勉強する場が減りますからね。やっぱり私たち舞台が勉強ですから。大阪で二日間、東京で一六日間の公演はすつと維持していただきたいのです。

それから、地方公演も肝心なんです。地方でも待つてくれる人がいたはるし、初めての人もいたはります。地方公

演のときは舞台人が少数数になりますから、力以上の役をもらうんです。大阪や東京でもらえない役をもらう。それが勉強になるんです。自分たちの勉強にもなり、また地方にも広めていく。一回でも多くそういう地方公演をやつていただくということは、私たち願うることなんです。

河合 その地方公演に行ったところの人たちと交流を通じて好きになる子がおつたらいいですね。

住大夫 そうです。子どもさんでもこのごろは太夫の見台の前に座らせたり、三味線持たしたり人形持たしたりして親しくおもしろくしています。やっぱりこつちから手を差し伸べて出向いていかんとあきまへん。

河合 そうすると、心を打つ子どもはボンと出てくると思います。
今日はどうもありがとうございました。
(了)

読書の功罪

文化庁の抜穴 河合隼雄

岡山県にすばらしい県立図書館が開館。記念講演をしたが、そのときになかなか興味深い質問を受けた。猿にしろ鳥にしろ「読書」などしないが、上手に育児をやっている。それに反して、よく読書している人間は、最近など特に下手な育児をする人が多い。このことをどう考えるかと言うのである。

私は一応次のようにお答えした。人間は他の動物と異なり、文明を手に入れた。このために動物とは比較にならない便利で快適な生

活を送っている。しかし、これは人間が「自然」に反して生きていることを意味する。その点、動物は自然のままに生きているので、育児などはうまくゆくだろう。人間は「自然に反する」道を歩み出した限り、「読書」も大切になつてくるのだが、やはり、どこかは「自然」に学ぶことも必要で、そのときは書物からの知識は有害になるかもしれぬ。読書は大切だが、その功罪についての認識も必要であらう。皆さんどう考えますか。

◆長官対談◆
 「文化人の本音」河合雄雄文化庁長官対談
 毛利 衛 日本科学未来館館長
 「長官コラム文化庁の抜く」

◆特集◆ 新たな文化財保護法の展開

「文化庁提言」
 社会情勢を踏まえた積極的
 かつ多様な文化財の保護を目指して
 「寄稿」

文化財保護法改正の周辺
 渡邊明義
 文化的景観の保護
 下村彰男

【解説】
 文化財保護法の一部改正

◆文化庁ニュース◆
 「日本映画・愛と青春 1965―1986」
 平成一六年度地域文化功労賞決定 ほか

編集後記

今月号の特集は「文化ボランティア」をテーマにしました。
 文化庁では河合雄雄長官が文化庁長官に就任して以来、「文化ボランティア」を推進しております。今回さまざまな取組を紹介させていただいたわけですが、皆さまも文化ボランティアをしてみたいかがでしょうか。そんなに大きなことをしようと気張らずに、どんな取組でもまず始めてみるのが大切だと思います。

先日、東京都墨田区にある江戸東京博物館に行

◆連載◆

「いきいきミュージアム」美術館・博物館事業レポート」
 (財)佐野美術館(静岡県)
 「芸術文化の活動風景」
 展示ディスプレイ
 「そうこうすればいいんだ」著作権教育実践事例」
 創作者を大切にすることを育てたい」
 JASRACの取組」
 「文化交流使の活動報告」
 詩人・ラッシュ・ヴァリエ
 「伝建地区を見守る人々―伝建時記―」
 商売の神様が残してくれたもの(大阪府富田林市)
 「遺跡を楽しむ」
 「文化庁の地域文化振興施策」
 「文化庁の地域文化振興施策」
 「文化芸術による創造のまち」支援事業
 「国語研究の最先端」
 電子政府
 「風を呼ぼう、わが町に―重要文化財との歩み―」
 農業倉庫からの文化の発信 学問 創造 交流
 「文化力ニュース」関西 関西元文化園の取組
 朝の光のクラシック
 「国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法」
 古き手紙の封の色々
 「日本の伝統美と技を守る人々」
 文化財庭園保存技術・文化財庭園保存技術審議会

文化庁月報 11月号 (通巻434)

平成16年11月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100-8959 東京都千代田区丸の内2-5-1

発行—株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
 本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16
 電話 編集 03 (3571) 2126
 販売 03 (5349) 6666
 URL : http://www.gyosei.co.jp

印刷所—ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 本体514円 送料76円
 年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株) ぎょうせい営業部広告課

電話03 (5349) 6657 (ダイヤルイン)

©2004 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●

http://www.bunka.go.jp